島根県安来市伯太町坊床古墓群の調査
－中世の古墓群－

村上　勇　西尾克己　守岡正司

はじめに
1．遺跡の位置と歴史的環境
2．調査の概要
3．遺構と遺物
4．考　　察
おわりに

はじめに

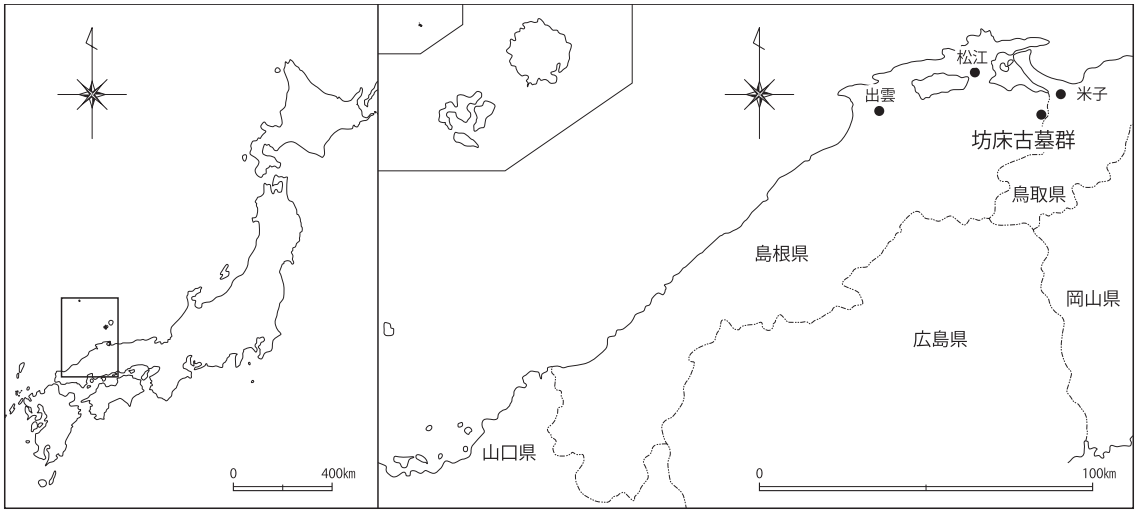
坊床古墓群は、1961（昭和36）年に、内田　才が一部を緊急調査し、『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集で報告を行っている[1]。それによると、古墓は4基が知られ、室町時代初期を下らぬ備前焼や常滑系陶器の大甕を骨蔵器としており、大甕の口縁部を板石で蓋をし、その上部に積み石を行うという古墓の構造がわかる数少ない事例であるという。

内田の問題提起にも関わらず、報告以後、本遺跡について言及されることは少なかったが、1987（昭和62）年、西尾克己による現地踏査で、削平された崖面に陶器片が露出しているのが確認された。その時点で、崖面が崩落する危険性が高かったこともあり、遺構の詳細や遺物の検討を通じて遺跡の全容解明に近づくため、1989（平成元）年6月25日から7月5日まで発掘調査を行った[2]。

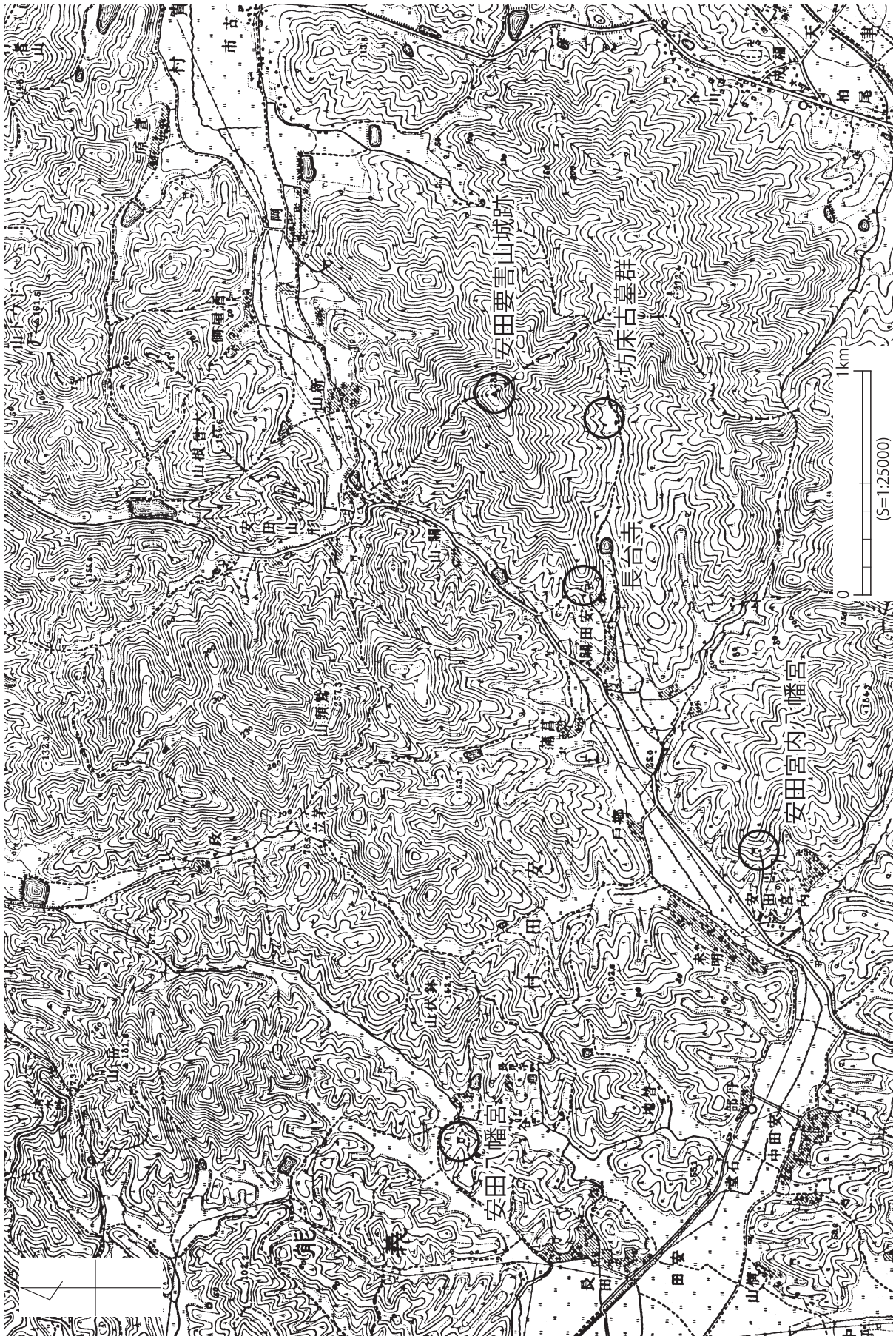
1989年の発掘で判明した点は、内田の調査結果と大きな異同はないが、遺構や遺物に関する知見の進展を踏まえ、若干の新たな解釈を追加し、坊床古墓群発掘調査の報告としたい。

1．遺跡の位置と歴史的環境

内田の記述を参考にすると、坊床古墓群は、島根県安来市伯太町安田関字本堂成（一名を東ノ坊とも呼ばれている）に所在する（第2図）。出雲国と伯耆国の国境に存在する要害山の南麓にあたり、天台宗長台寺のある安田関から分かれ、狭隘な谷間を東に1㎞入った坊床集落の谷奥にある棚田の最上部に位置する（第3図）。標高は100～110m。この場所には、現在の長台寺の本尊である千手観音菩薩像が祀られていた本堂があったと言われ、本堂成の地名が残る。また、この東ノ坊から南西に80mほど離れ



第1図　遺跡の位置図



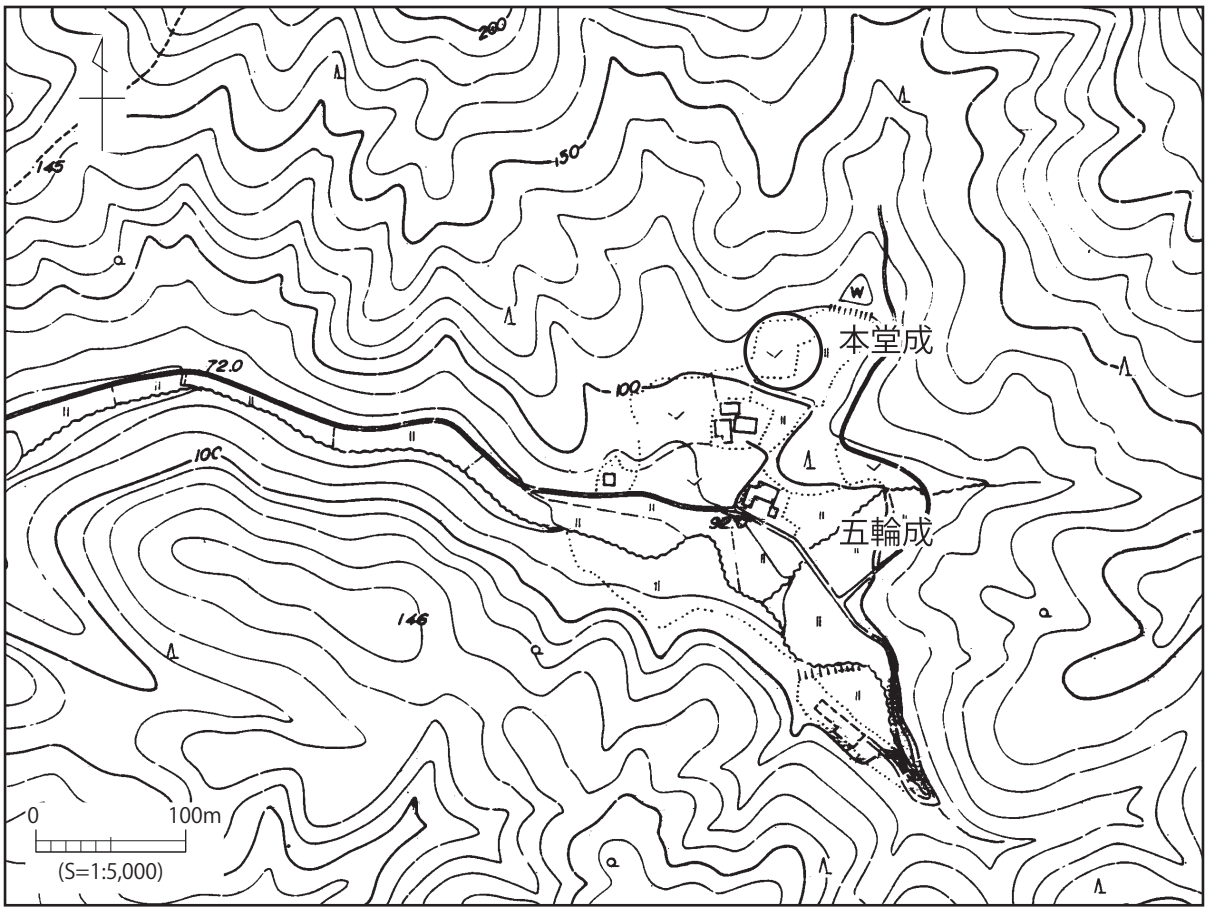
第２図　遺跡周辺の地形図（S=1/25,000）「母里」（参謀本部大正４（1915）測量）

た一段低い場所を西ノ坊といい、安田八幡宮の本地仏の地蔵菩薩像を祀っていたとの伝承がある。この度、発掘調査を行った古墓は、東ノ坊と呼ぶ本堂が存在した水田（今は窪直しのため、地形がかなり変わっている）の西端にあり、一部遺構が崖面に露出していた。

この地域は、古代には山陰道が通じていたと考えられており、『出雲国風土記』記載の手間剡の比定地もある。中世段階には安田荘に属し、石清水八幡宮末社の安田別宮の所在地である。安田荘は、11世紀末頃には勧請されたと考えられる石清水八幡宮末社安田別宮を核に周辺を荘園化したものと思われ、出雲八社八幡の中心として勢力を誇った。保元３（1158）年12月３日石清水文書には、出雲八別宮として「安田別宮」が見え、また、承久の乱後は武蔵国御家人江戸氏が地頭に補任された。文永８（1271）年11月日の「杵築大社三月会相撲舞頭役結番帳」には、十五番に「安田庄内九十丁　江戸四郎太郎」、「安田庄内三十五丁　江戸四郎太郎」が見える。南北朝期には隣国伯耆守護山名氏の影響を受けた。古墓群の後背丘陵上には、戦国期に尼子氏が築いた安田要害山城があったが、永禄７（1564）年に毛利氏の手により落城した[3]。谷頭にある長台寺は、寺伝によれば、天平年間に行基が開創し、当初は坊床にあって洪水により流出。聖武天皇の勅願により現在地に再建されたもので（第２図）、長台寺境内には隣接した場所にあった長台寺境外寺跡（長台寺付近寺跡）の塔心礎が移築されている[4]。

２．調査の概要

調査は崖面に露出していた陶器の周辺から開始した。調査により、瓷器系大甕を骨蔵器とする墓坑が確認できた。また、周辺を観察すると同様な遺構があったため、当初調査対象にはなっていなかったが、位置関係と遺構の残存状況を知るため発掘を実施した。発掘の結果、墓坑に備前焼大甕を埋置した遺構



第３図　遺跡の周辺詳細図（Ｓ＝1/5,000）

を確認した。遺構、遺物を比較すると、1961（昭和36）年に内田　才により調査が行われた１号墓であることが確認できた。内田の報告では地形図が掲載されなかったが、この地点が東ノ坊にあたることが判明した。また、報告では１号墓から３号墓がまとまって東ノ坊に所在し、４号墓は西ノ坊にあるとされている。今回新たに調査した瓷器系大甕を骨蔵器とする古墓（東ノ坊４号墓）は、1942（昭和17）年の開墾のため発見された第１～３号墓より南西に所在するもので（第９図）、１号墓から約2.8m離れている。今回、東ノ坊４号墓と呼称し、遺物の内容から東ノ坊５号墓の存在も予測した[5]。

３．遺構と遺物

東ノ坊１号墓（第４図）

墓坑の上端面は、墓坑上部の粘土を完全に取り払わなかったため、正確にはわからなかったが、およそ径１m内外と考えられる。墓坑底部は、直径約35㎝の略円形の平坦面を呈し、深さは約１mを測る。墓坑内部には備前焼大甕の底部や口縁部がかなり残存していた。

内田報告では、1942（昭和17）年の発見当時には、この大甕の口縁の直上には大石があって、さらにその上には転石が幾重にも積み重ねてあったという。このことから、当初は径２～2.5m、高さ１m前後の積石があったことがわかる。

出土した備前焼大甕（第６図１）は、全体の約1/3を欠損するが、ほぼその全容を窺い知ることができる。器高84㎝、口径56㎝、口縁部は玉縁状を呈し、肩部はなで肩となり、最大径は肩部付近にあって約70㎝、底部は安定した平底となり、径約40㎝を測る。焼成は良好で、全体に褐色を呈し、頸部から肩部にかけて淡黄色の自然釉が付着しており、外面には若干の光沢が認められる。

時期は乗岡編年の中世３期、重根編年のⅣA期と推定され[6]、14世紀中頃から15世紀前葉の遺物と考えられる。また、土師器坏も１点採集されたが、内田の報告時点までに所在が不明となった。

東ノ坊２号墓

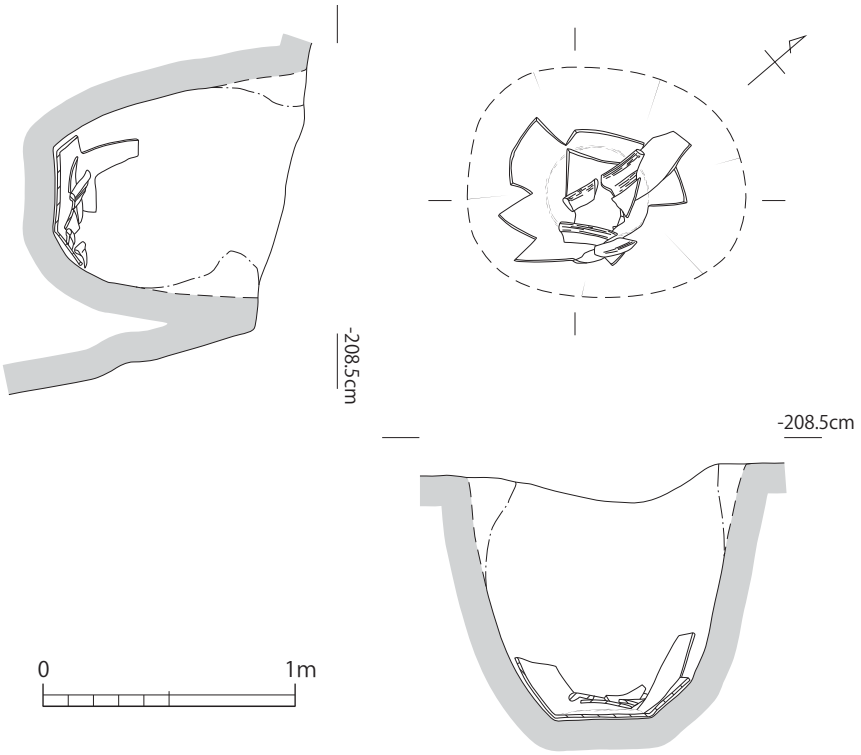
全体構造、遺構に関しては不明である。越前焼と考えられる瓷器系陶器大甕片（第８図１）１点が採集されただけである。

内田の図面から推測するしかないが、破片は口縁部であり、口縁端部が外上方に伸び、頸部は丸みを持ちつつ外反する。越前焼木村編年のⅢ－２期で、14世紀前葉から中葉の製品と考えられる[7]。

東ノ坊３号墓

１号墓と同様の構造が推測されているだけで、遺物として、大甕の口縁部と胴部片が採集されたに過ぎない（第８図２）。

内田の図から、大甕は越前焼木村編年のⅢ－２期に属すると思われる[8]。



第４図　東ノ坊1号墓遺構実測図（S=1/30）

東ノ坊４号墓（第５図）

４号墓の上半部は畑に開墾される際に、かなり削平され原形をとどめていないが、遺存する墓坑は平面形が楕円形で、上端径は東西65㎝、南北75㎝、深さ55㎝を測り、底部は14×16㎝ほどの略円形の平坦面を呈する。墓坑の北西側の地山面の状況は、長さ30㎝ほどの平坦面があり、その先端はやや山形に膨らみ、さらに再び凹んだ後、石積みの下方に徐々に立ち上がっていく。地山面の上層は地山ブロックを含んだ暗褐色土で、畑地として攪乱を受けたことがわかる。表土は黒褐色土の腐葉土である。墓坑内の土は軟質の褐色である。近年、水田とするため削平され、南東に向いた崖面となっている。

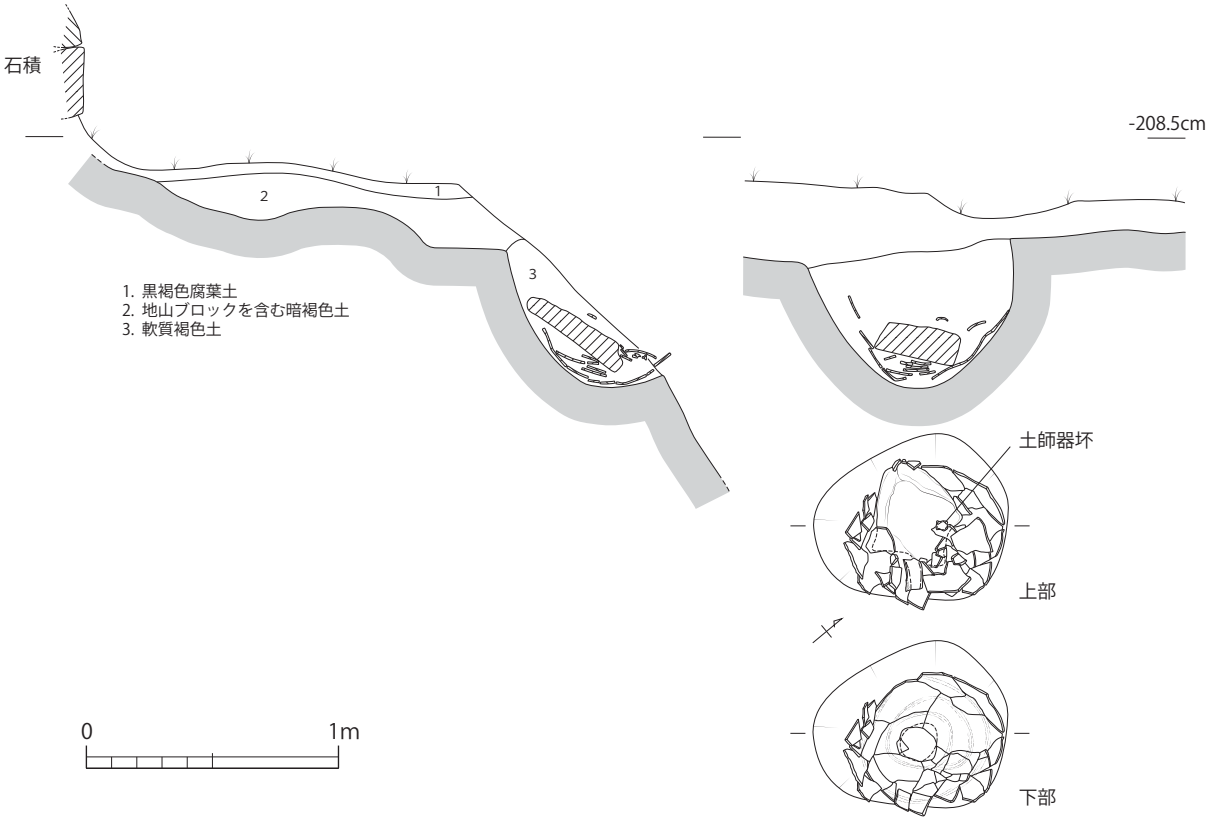
二度にわたる攪乱によって墓坑にあった大甕はその大半が失われ、下半部が僅かに原状を呈するのみであった。甕片の直上には、差し渡し35×45㎝、厚さ７～20㎝ほどの板石が落ち込んでいた。この板石は甕の口縁部を塞いでいた蓋石であろう。この蓋石の上部からは径４㎝ほどの底部糸切り離しをした小形の土師器坏が１点出土した。

また、墓坑内崖面寄りには甕片に混じって中世須恵器の口縁部と胴部の破片が認められ、これは後世に混入したものと思われる。同一個体となると思われる破片は4号墓付近からも多く採集されているもので、この中世須恵器の甕を主体とする第５号墓なるものが付近にあったと考えられる。

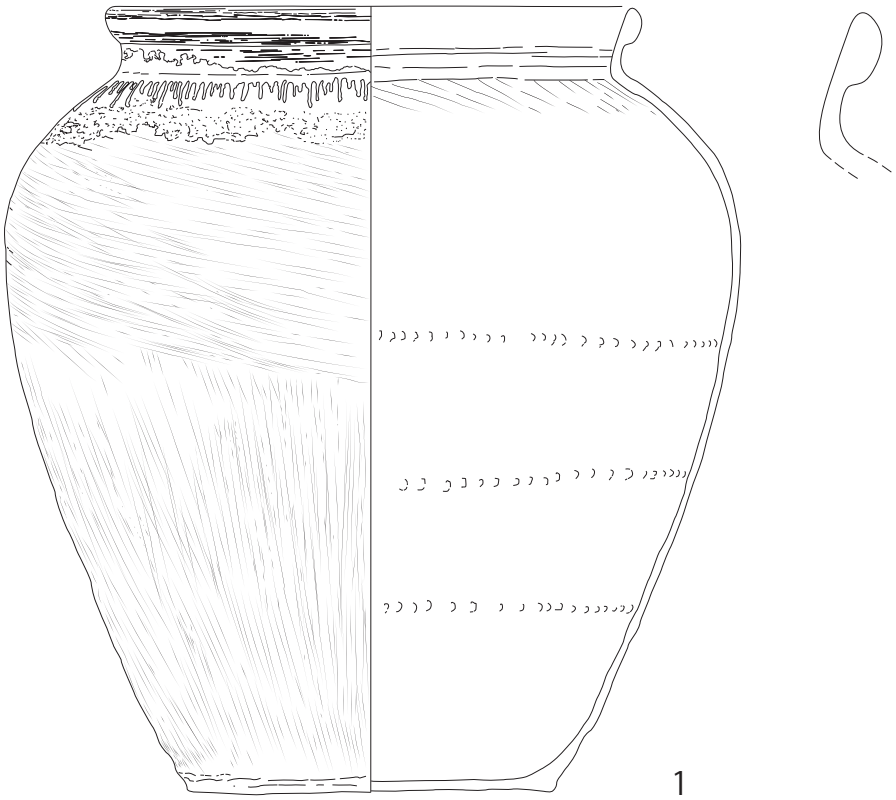
さらに、土地所有者の話によれば、４号墓の北西に積み上げられた石積みの石材はこれら古墓の上部に積み上げられていたものというから[9]、１号墓と同様、元は積石塚型式のものであったと考えられる。その規模は残存する石材の量から径２ｍ、高さ１ｍほどになると推定される。

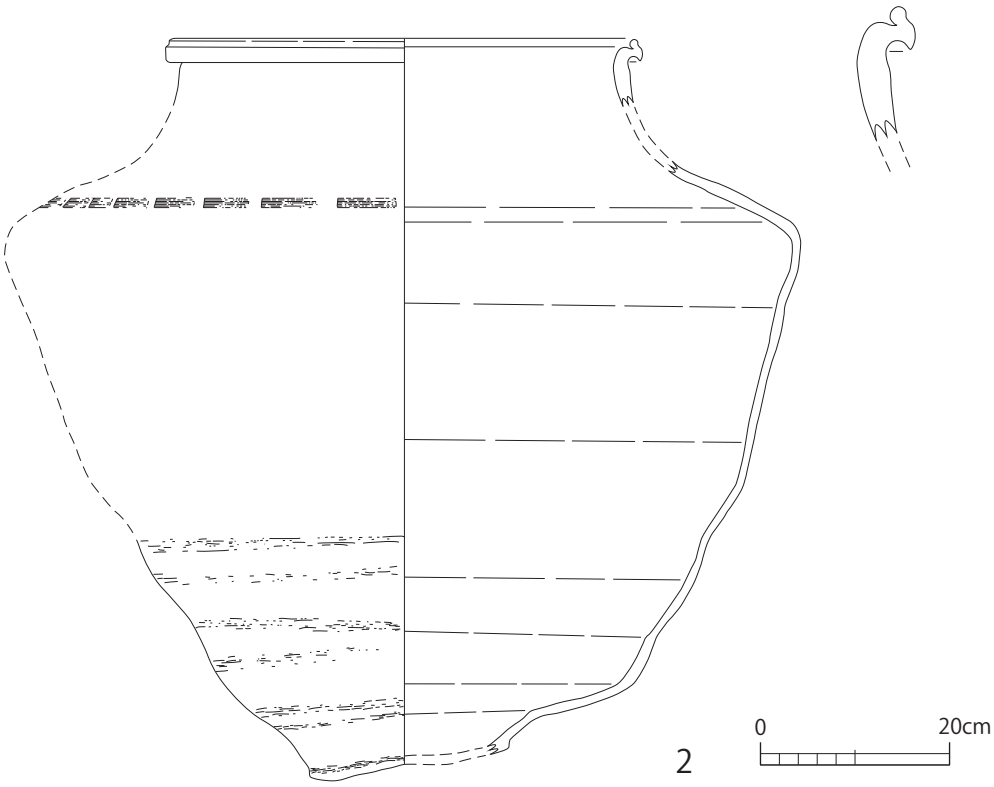
今回の発掘調査で発見された遺物としては、越前焼と考えた瓷器系陶器大甕、及びその内部や付近から出土した土師器坏と中世須恵器甕がある。

越前焼大甕（第６図２）は、全体の1/2を欠損しているが、口縁部の破片が認められることから、ほぼ全容を窺い知ることができる。残存高68㎝、口径49㎝、最大径は肩部にあって約80㎝、底部径17～18㎝を測る。胴部の器厚は0.8～0.9㎝、肩部1.0～1.2



第５図　東ノ坊４号墓遺構実測図（S=1/30）





第６図　東ノ坊１号墓・４号墓出土遺物実測図（S=1/8）　口縁部（S=1/4）

㎝と薄く仕上げられ、断面の観察からすると幅８㎝ほどの粘土帯を螺旋状に巻き上げて成形した痕跡が認められる。肩部はイカリ肩を呈し、ここに3.5～６㎝を測る押印文様を施す。残存部分には、押印が３ヶ所、その存在が見られる。その間隔は約６㎝を測る。

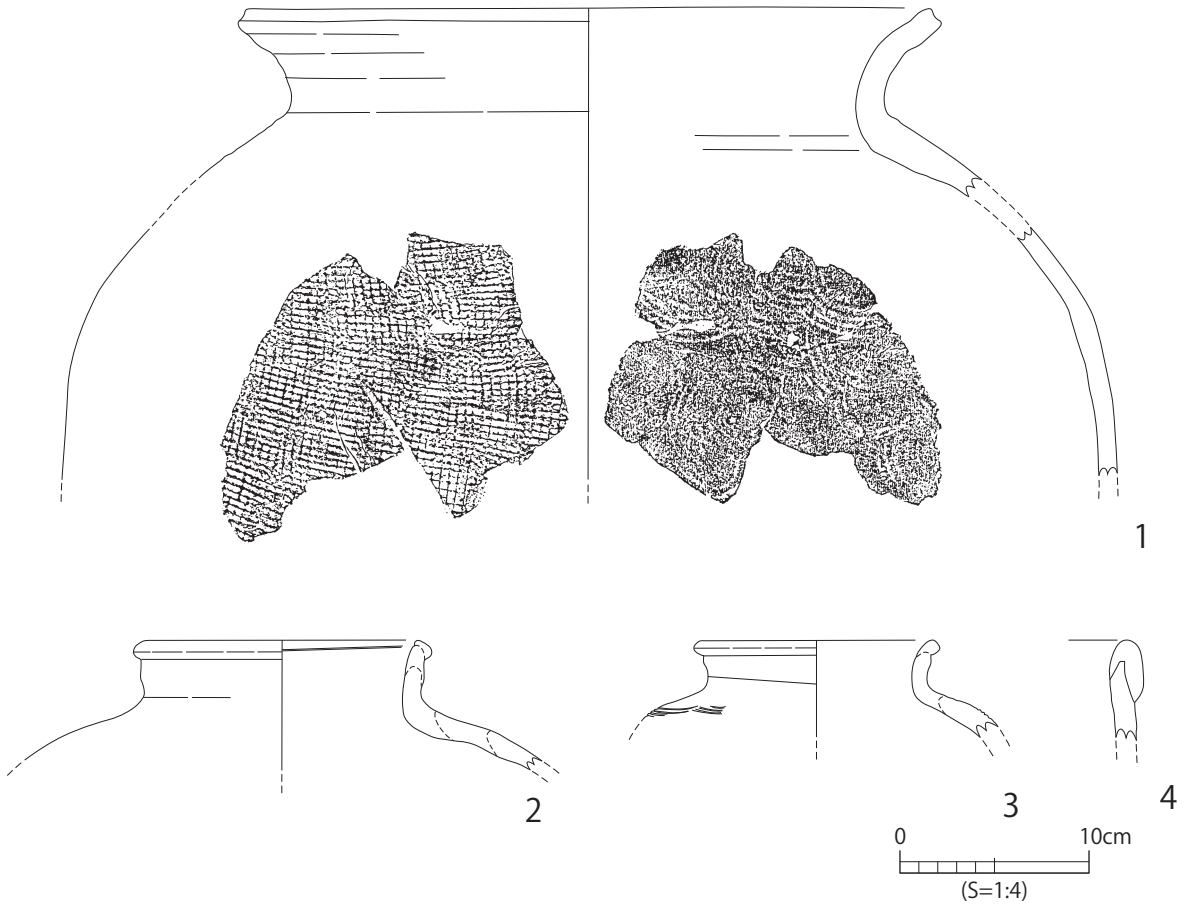
口縁部はＴ字状を呈し、下方にわずかに伸びる。口縁端部は内傾し、内面がやや肥厚する。肩部には淡緑色の自然釉がかかり、一部は底部まで流下している。胴部はかなり変形し、左右対称ではない。底部は平底で、中央部の破片がない。頸部から胴部にかけての内面は丁重なナデ調整である。外面は酸化焼成により茶褐色を呈し、鉄分の吹き出しはない。これらの特徴から、大甕は越前焼で、13世紀後葉から14世紀前葉、木村編年のⅡ－２新～Ⅲ－１期と考えられる[10]。

土師器坏は、底径４㎝を測り、底部は糸切り離しで、器壁には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。

東ノ坊５号墓

上述のように、東ノ坊4号墓の墓坑内崖面寄りには、瓷器系甕片に混じって中世須恵器の口縁部付近の破片が、また、同一個体となると思われる破片が４号墓付近から多く採集されており、周辺に中世須恵器の甕を主体とする5号墓が存在した蓋然性は高い。

須恵器甕（第７図１）は、口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径は36㎝を測る。器形は口縁部がやや外反し、端部にやや凹みを有している。調整は口縁部の内外面にヨコナデ、胴部外面に格子目タタキ、内面に同心円タタキの後ナデを施している。格子は横長長方形を呈し、大きさは３×５㎜を測る。色調は青灰色を呈し、胎土は灰白色で、やや大きめの砂粒と細かい砂粒を含む。胎土や形態から岡山県総社市周辺で生産された亀山焼と考えられ、この甕の時期は、口縁部の特徴から鎌倉時代後半と思われる。



第７図　東ノ坊５号墓（１）と古墓群東側水田・農道採集遺物実測図（S=1/4）

その他の遺構と遺物

第７図の２、３は、古墓群東側の水田で採集した備前焼壺である。口径は、２が15.8㎝、８が13㎝で、小さい玉縁状を呈する。３は肩部に櫛状工具による波状文が施される。４は水田東側農道で採集した備前壷で、口縁部は玉縁の扁平化が進行したものである。時期は乗岡編年の中世４～５期、重根編年のⅣB期と推定され、15世紀中頃から末と考えられる。これらの遺物から何らかの遺構の存在の推測も可能であるが、周辺は完全に削平された後であるので、判然としないと言わざるを得ない。

４．考　　察

今回の調査により大甕を骨蔵器として使用した古墓２基を確認した。島根県内では、大甕を使用した古墓が複数確認された調査例は少なく、坊床古墓群は貴重な例である。

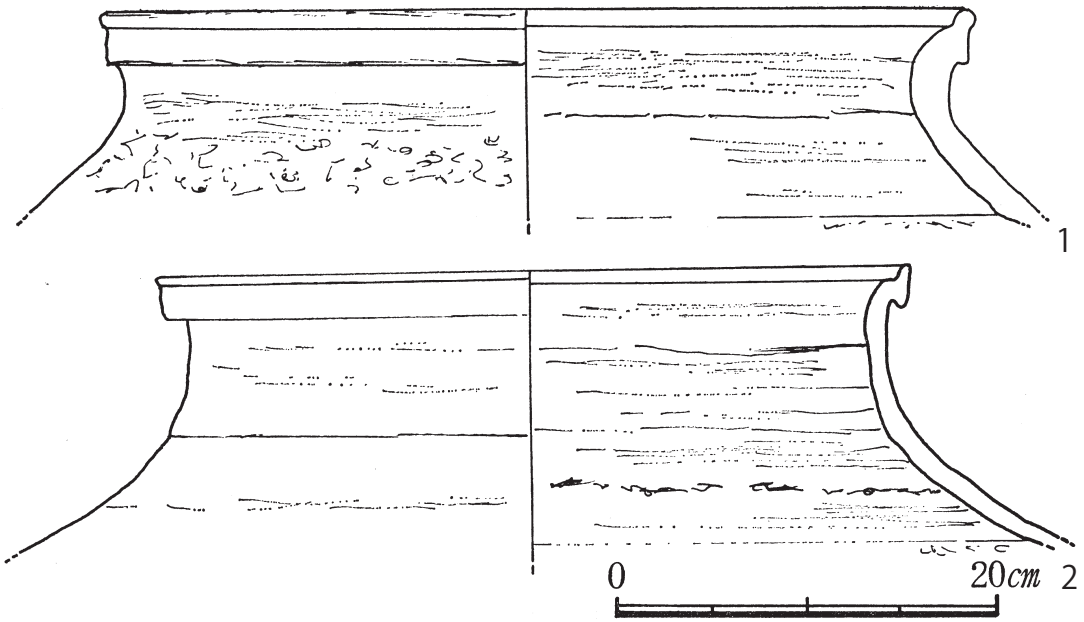
【遺構】

まず、配置を検討する。内田報告の「第２図坊床古墓実測図」の平面図には、２号、３号と書かれた×印があり、それぞれが、各墓の位置と考えられた。その平面図に今回実測した１号墓と４号墓の配置図を、方位及び石垣を参考に挿入したものが第９図である。１号墓の中心と２号墓は、2.5m、１号墓と３号墓は1.5m、２号墓と３号墓は2.5m、１号墓と４号墓は2.8mと離れている。見方によっては、２～４号墓が直線上に並んでいた可能性もある。

直線上に並ぶ古墓の例としては、松江市澄水寺跡が知られている[11]。澄水寺本堂跡の南西側におよそ30mの平坦面があり、その南側に長さ11m、幅３m、高さ１mの長方形石積基壇があり、周辺に五輪塔や宝篋印塔の破片が散在している。その一角が直径、深さ各１mほどの孔が掘られ、13世紀後半の越前焼大甕の破片が散在していたという。骨蔵器としての大甕の上部に石塔が置かれたことが推察されており、この長方形石積基壇が古墓群であった可能性は高い。また、本堂の周辺部に位置していることも性格を考える上で参考になろう。

坊床古墓群の上部構造は大甕の上に板石で蓋をし、粘土や礫で覆う構造であったと復元できる。地上部の構造については、大甕を用いた中世墓を検討した岩橋康子の指摘が参考になる[12]。地上には石組みが見られ、特殊な例で五輪塔などの石塔や石室など何らかの施設が伴うものがあるという。

こうした積石塚状の遺構の検出は、島根県内では類例は希であったが、地下構造に瓷器系陶器や備前焼大甕を伴う遺跡例も増加している、早くから著名

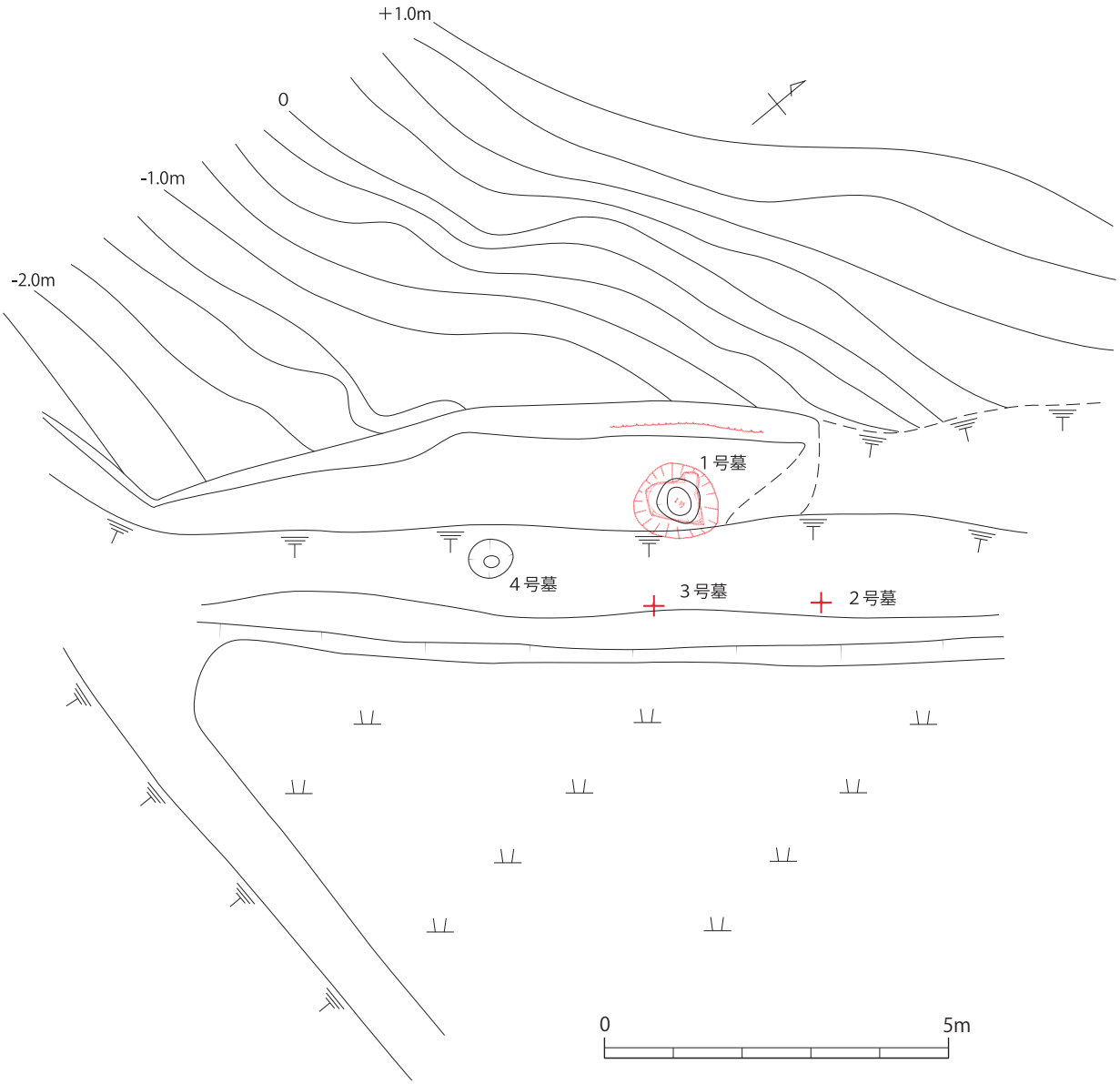


第８図　東ノ坊２号墓・３号墓出土遺物実測図（S=1/4）（内田報告第４図を転載・一部改変）

な出雲市荻杼町荻杼古墓の常滑焼甕[13]の他に、瓷器系陶器は、松江市八雲町叶ザコ遺跡、同戸波遺跡、松江市福原町澄水寺跡、松江市玉湯町伝佐々木伊予之守古墓があり[14]、備前焼の事例では出雲市塩冶町神門寺境内廃寺10トレンチ[15]や、出雲市上塩冶町寿昌寺遺跡SK41[16]から大甕が出土した例がある。これらの中には同じ性格の遺構もあろうが、発掘調査を伴う総合的な研究が必要であろう。ただ、本遺跡の場合は近接地に長台寺旧跡が存在し、東ノ坊古墓群の存在が内田の記述どおり認められるので、今後の調査で遺跡全体の性格も明らかになる可能性は高い。

【遺物】

1号墓からは14世紀中葉から15世紀前葉と見られる備前焼の大甕が出土した。これは前回調査の資料と同一のものの一部であった。上部構造も聞き取りによって積石塚状のものであろうことが知られた。4号墓は、おおむね1号墓と同様の遺構であったことが類推させるが、墓坑内には瓷器系陶器の甕が埋置されていた。13世紀後半から14世紀前葉頃の越前焼と考えられる。内田報告には2号墓及び3号墓出土の瓷器系陶器大甕が常滑系として掲載されており、これらの瓷器系陶器大甕は口縁部の形態から4号墓出土大甕と同時期で、今回は越前焼とした。



第9図　東ノ坊古墓群遺構配置図（S=1/100）（内田報告第2図に記載されてるトンボと磁北参考に作成）

古墓に使用されている瓷器系陶器甕は、これまで常滑焼と考えられたものが多く、伝佐々木伊予之守古墓が中野分類５型式（1220～1250）、叶ザコ遺跡が中野分類５～６a型式（1220～1250）、荻杼古墓が中野分類６a型式（1250～1275）[17]、越前焼では澄水寺跡がⅡ－２期（1250～1290）坊床２～４号墓がⅢ－１期（1290～1320）と考えられる。瓷器系陶器甕が骨蔵器と使用されている時期は、13世紀～14世紀前葉である。

また、備前焼甕は神門寺境内廃寺が重根分類ⅢB期、寿昌寺遺跡SK41が重根分類ⅣB期、東ノ坊１号墓が重根分類ⅣA期と推定され、14世紀中葉から15世紀中葉である。骨蔵器として使用される陶器が、瓷器系陶器から備前焼へ転換する島根県内の様相がこれらの事例からも確認される[18]。

【歴史的背景】

早く坊床古墓群について報告した内田　才は、その背景について、「信仰的な意味をも含めて理解すべき」と言い、「長台寺との関係も深い考慮を払う必要がある」と述べている。

かつて、坊床には天台宗長台寺の本尊である千手観音菩薩を祭った本堂が存在したと云い伝えられている。天台宗の千手観音菩薩信仰については、久保智康と井上一稔が興味深いことを述べている[19]。井上は、京都周辺では、平安時代になると千手観音を本尊とする寺の数が多くなり、それらの寺院の多くは天台系寺院であり、一つの山を分けるように千手観音と毘沙門天のすみ分けが見られる例があり、天台宗寺院では、それらの機能を使い分けていると言っている。また、久保は出雲国の事例を踏まえながら、国境・郡境の地に山寺が建立され仏像群を祭っている意味に触れ、山寺の本尊設置の歴史的課題に答えている。坊床に近いところでは、伯太川中流域の清水寺に触れ、巨視的に見れば国境に近く、出雲国域の厄災消除を祈る十一面観音悔過などを行い、古代から続く発展を平安後期にも可能としたという。さらに、古代交通路の峠、あるいはその近くに仏堂を建て、何らかの仏教儀式を行った山寺跡は各地で見つかっており、境界における山寺の宗教的役割がいかに大きかったかを物語っていると述べている。

冒頭で指摘したように、坊床古墓群は出雲と伯耆の国境に位置し、古代山陰道に接し、近接する関の存在も明白であり、千手観音の安置もあって、上記に言われるような状況に誠に合致している。要害山の東側である会見郡（鳥取県）では、管見の限りでは古代寺院の存在は明確ではないが、多くの経筒出土地（経塚）が知られており[20]、天台系寺院との関係も推察されるところである。

久保の論考は、坊床古墓群と本堂成にあった寺院の歴史的背景を考える上で極めて参考になると考える。

なお、蔵骨器として使用された常滑焼や越前焼の大甕の流通について、鳥取県の瓷器系陶器の様相を検討した佐伯純也は、鳥取県内で西伯耆の出土例が多く、中海沿岸に近接する遺跡に集中しており、流通の拠点がこの付近にあると指摘している。また、その時期は木村編年のⅡ～Ⅲ期で、13世紀から14世紀に相当するとも述べている[21]。坊床古墓群は中海と河川により繋がっていて歴史的背景を考えるうえで見逃せない指摘である。

島根県では、出雲平野に存在する出雲市東林木町青木遺跡や出雲市渡橋町蔵小路西遺跡から瓷器系陶器が多数出土している[22]。荻杼古墓も含めこれらの遺跡は斐伊川が宍道湖に流入する下流部近くに位置し、周辺には内海水運の拠点としての津の存在が考えられるのであり、背後に展開する山岳寺院の存在などと重ね合わせ、総合的に検討する中で、こうした遺跡や古墓群の性格も明らかになり、坊床古墓群の歴史的位置付けもより鮮明に描かれると考える。

以上、関連すると思われる事案の一部に触れてみたが、的外れになっていなければ幸いである。

おわりに

今回、1989年に遺跡の全容をつかむ一助として発掘調査を実施した坊床古墓群の報告を行った。１号墓は備前焼大甕、４号墓は越前焼大甕を骨蔵器としており、蓋として板石を使用し、その上部に積石塚

状に割石を築いていることを確認した。

時期は使用されていた骨蔵器の形式から、鎌倉時代後半から南北朝時代と推定され、この時期の葬送の様相を解明する貴重な資料となった。また、12世紀後半の常滑焼大甕の受容から、13世紀から14世紀前葉の常滑・越前焼を経て、14世紀中葉から備前焼大甕が山陰に流入する変化への過程が把握できる遺跡として興味深い資料を提供することができた。

付　記

出土遺物は伯太町教育委員会（現安来市教育委員会）で保管されている。報告にあたり、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、安来市教育委員会舟木聡氏に協力を得ました。記して感謝致します。

註

（１）内田　才1961

（２）発掘調査は以下により実施した。

遺跡名称　坊床寺跡

（島根県遺跡目録登録番号No.2343）

所在地　島根県安来市伯太町安田関字坊床

（旧能義郡伯太町）

調査面積　15㎡

調査期間　1989（平成元）年6月25日～7月5日

調査指導　山本　清、勝部　昭

調 査 員　岡崎雄二郎、村上　勇（調査担当者）、瀬古諒子、西尾克己、広江耕史、三宅博士

調査参加者　内田雅巳、佐藤雄史、原田敏照、守岡正司、宮本正保

調査時は遺跡名称を遺跡目録掲載のものを採用したが、内田も既報で用いており、遺跡の性格を明瞭にするため、今回は「坊床古墓群」を使用した。また、内田は小字を本堂成としているのでそれに倣い、東ノ坊は通称であるが、西ノ坊との関係もあり、今回は積極的に使用した。

（３）安田要害山城跡調査団1992。文献史料には長臺寺城として現れる。

間野1992。坊床古墓群の周辺にも室町時代から江戸時代初めの五輪塔や宝篋印塔が集められている。

（４）伯太町2004。

現長台寺には石田茂作が飛鳥期の三重孔法隆寺式仏塔礎石としたものがあり、寺の前面に広がる岡の原廃寺跡から瓦片等と共に明治初年に出土した。

（５）内田は、東ノ坊の１～３号墓と西ノ坊に所在した４号墓を合わせて坊床古墓１号～４号を設定している。新たな調査で、それらは東ノ坊、西ノ坊に別れ、さらにそれぞれ何基かの古墓の追加が見込まれる状況であることを踏まえ、今回、判明した東ノ坊１～４号墓の他、予測される東ノ坊５号墓を設定し、内田の４号墓は西ノ坊古墓と仮称することにした。

（６）本報告の備前焼の年代観に関しては、乗岡2005、重根2003を参考にしている。

（７）３号墓の甕と併せ、内田が常滑系の陶器としたものを、本報告では越前焼とした。田中照久氏の教示による。本報告の越前焼の年代観に関しては、木村2011を参考にした。

（８）（７）に同じ。

（９）（１）に同じ。

(10) この瓷器系陶器大甕に関しては、2011年第10回山陰中世土器検討会の席上で、生産地を常滑焼とする説と越前焼とする説があったが、今回は報告者が特徴を検討して、越前焼とした。山陰出土の常滑焼・越前焼に関しては松江考古学談話会1992、山陰中世土器検討会2011を参照。

(11) 岡崎雄二郎1992、林　健亮2017。

(12) 岩橋康子他2011。

(13) 近藤　正1971、岩橋康子他2011

(14) 松江考古学談話会1992、片岡詩子1992、宮本徳昭1992、八雲村教育委員会1983

(15) 出雲市教育委員会1985

(16) 出雲市教育委員会2004

(17) 中野晴久2012

(18) 備前焼については、島根県では重根分類ⅢＡまでは極少量しか出土せず、ⅢＢに点数は増えないが、分布が広がり、ⅣＡに点数、分布とも急増する（佐伯他2008）。

(19) 久保智康2012

久保智康編2016「座談会古代の山寺を考える」『日本の古代山寺』での井上一稔氏の発言。

（20）岡田善治氏の教示による。

（21）佐伯純也2011

（22）廣江耕史2011

引用・参考文献

出雲市教育委員会1985『神門寺境内廃寺』

出雲市教育委員会2004『寿昌寺遺跡・築山遺跡発掘調査報告書』

岩橋康子・西尾克己・深田浩・守岡正司2011「出雲市荻杼古墓出土品の再検討」『古代文化研究』№19　島根県古代文化センター

内田　才1961「伯太・坊床古墓群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集　島根県教育委員会

岡崎雄二郎1992「松江市・澄水寺跡出土の陶磁器」『松江考古』８号　松江考古学談話会

片岡詩子1992「玉湯町・伝佐々木伊予之守古墓出土常滑甕」『松江考古』８号　松江考古学談話会

木村孝一郎2011「越前焼の編年的研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系陶器』　山陰中世土器検討会

久保智康2012「古代出雲の山寺と社」『大出雲展図録』　島根県立出雲歴史博物館

久保智康編　2016『日本の古代山寺』　高志書院

近藤　正1971「出雲荻杼発見の骨蔵器」『考古学雑誌』第54巻３号　日本考古学会

佐伯純也・加藤裕一・重根弘和・玉木秀幸2008「山陰地方出土の備前焼」『山陰地方における備前焼』　山陰中世土器検討会

佐伯純也2011「因幡・伯耆における瓷器系陶器の様相」『山陰地方における越前・常滑系陶器』　山陰中世土器検討会

山陰中世土器検討会2011『山陰地方における越前・常滑系陶器』

重根弘和2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』　近藤喬一先生退官記念事業会

中野晴久2012「編年表」『愛知県史別編窯業３　中世・近世常滑系』

乗岡　実2005「備前」『中世窯業の諸相』　中世窯業の諸相実行委員会

伯太町2004『伯太町誌下巻』

林　健亮2017「松江市坂本町澄水寺跡の再検討」『古代文化研究』25　島根県古代文化センター

廣江耕史2011「出雲地方」『山陰地方における越前・常滑系陶器』　山陰中世土器検討会

松江考古学談話会1992『松江考古』８号

間野大丞1992「五輪成出土の石塔群について」『松江考古』８号　松江考古学談話会

宮本徳昭1992「八雲村・叶ザコ遺跡出土の瓷器系陶器焼」『松江考古』８号　松江考古学談話会

村上　勇1979「山陰の中世のやきものに関する覚え書」『松江考古』２号　松江考古学談話会

八雲村教育委員会1983『昭和57年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う戸波遺跡発掘調査報告書』

安田要害山城跡調査団1992「伯太町・安田要害山城跡調査報告」『松江考古』８号　松江考古学談話会

挿図　山本清氏調査指導風景

図版 1

1．東ノ坊古墓群　遠景

2．東ノ坊古墓群　調査前

3．東ノ坊４号墓　検出状況

4．東ノ坊４号墓　検出状況

5．東ノ坊４号墓　蓋石検出状況

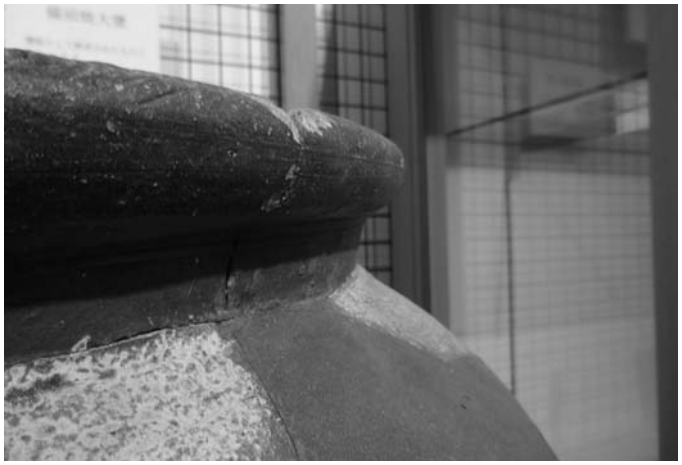
6．東ノ坊４号墓　蓋石除去後

7．東ノ坊４号墓　完掘状況

8．東ノ坊１号墓　検出状況

図版２

9．東ノ坊１号墓出土備前焼大甕



10．備前焼大甕の口縁部

11．東ノ坊４号墓出土越前焼大甕

12．越前焼大甕肩部押印